

パリから見えるこの世界

Un regard de Paris sur ce monde

第41回 哲学的感情、あるいは世界の全体をどこに見るのか

「幸いなるかな、ユリシーズのように、さてはまた、
金羊毛を獲得したあの男のように、みごとな旅をした者は、
そのあとで、経験と分別をたっぷり具え帰郷して、
余生を、肉親たちのなかで過ごせる者は！」

——ジョアシャン・デュ・ベレー

(入沢康夫訳)

世界観という言葉がある。ドイツ語、英語、フランス語では、それぞれ *Weltanschauung* / *worldview* / *vision du monde* と言う。フランス語や英語でもドイツ語がそのまま使われることが稀でない。哲学の領域に入るまでこの言葉が会話に出ることもなければ、したがってわたし自身も使ったことはなかった。その昔、カリフォルニア大学バークリー校のインタビュー番組 *Conversations with History* を観ている時、その冒頭で「あなたの世界観は？」という質問がよく出てくることに驚いた。人生観という言葉を目にするにはあったが、世界観という言葉を目にするには余りなかったからである。人生観にはこの世の具体的なことにどう対処するのかという現実的な含みが強いように思うが、世界観という言葉にはそこを超えた哲学的な響きを感じる。二つの言葉が視野に入れている世界のスケールが異なり、訊き手の方も自らの世界観について振り返ることがあったからこそ、そのような問いが出てきたのだろう。今回は、われわれが科学をする上でも生きる上でも重要な意味を持つこの言葉から広がる世界について考えてみたい。

もう3年ほど前になるが、次のような瞑想をしたことがある。

「——自分が投げ出されているこの世界——その全体をどこに見るのか——人それぞれだろう——家族、仕事場、仕事社会、地域社会、国、そして所謂世界——人は自ら見ている世界の中で力を尽くし、幸せを求め、認められようとする——ヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770-1831) さんによれば、そこに真の自由はない——しかし、この地球を超えた世界がその人の世界の全体だと仮定したら、一体どうなるだろうか——その時、自分を見ているのは自分しかいなくなる——自らの内なる規

範に合わせてもう一人の自分が自分を評価することになる——それまでの全体の中で纏わり着いていたものが剥がされ、その人間だけが残る——その人間の本質的なもの、その精神、思惟に行き着く——ヘーゲルさんに倣えば、その時、精神は自らに帰還する——自らが自らを振り返ることから二次意識が生まれ、そこに絶対的自由が訪れる——視線はいつも遥か彼方に向かうと同時に深く内に向かっていて——それは高貴な生き方かもしれない——それこそが哲学的生き方なのかもしれない——そこまで行かなければ、すべては虚しいのではないか——」

この瞑想では、世界の全体の捉え方次第で精神の自由が決まってくるというところに辿り着いた。それ以来、答えるべきこととして「自らの世界の全体をどこに見るのか？」という問いが生まれた。



ロマン・ロラン

若き日にはよく耳にしたが、今や忘れられたかに見えるフランスのノーベル賞作家にロマン・ロラン (Romain Rolland, 1866-1944) がいる。彼は 1927 年 12 月 5 日にフロイト (Sigmund Freud, 1856-1939) に宛てた手紙の中で、永遠の感覚、あるいは永遠ではないにしても境界を感じさせない大洋の中にいるような感覚として「大洋感情」*« Le sentiment océanique »* という言葉を使った。ロマン・ロランは宗教的な感情として使ったようだが、フロイトはそこに宗教的な感情を見ることはなかった。ただ後年、他者との間に横たわっていた境界が溶けて消えるような感覚、さらに宇宙 (コスモス)

との一体感、あるいは自らを超える全的なものとの一体感にも通じるものとして理解するようになったとされている。現代フランスの無神論者アンドレ・コント・スポンヴィル (André Comte-Sponville, 1952-) 氏も宇宙との一体感を経験した後、特に宗教は必要ないのではないかと考えている。わたしはそこに哲学に向かう原初的な感情を見たいと思っている。

「大洋感情」という言葉を聞くと思い出すことがある。もう 35 年ほど前になるアメリカ滞在中のこと。夏休みを利用して巨大なアメリカ車でマンハッタンから長旅に出た。まずメイン州ポートランドまで行き、そこからカナダのノバスコシア州ハリファックスまで大型船で大西洋を渡り、ケベック、モントリオールを経てウィニペグに向かった。しかし、雷雨が激しく前が見えなくなり、泣く泣く引き返し、ナイアガラの滝からニューヨーク州を南下、マンハッタンに戻ってきた。途中、ケベックの町が遠望された時、これまでに聞いたことがないほどの爆音が始まった。何が起こったのか分からず運転し続けたが、暫くしてマフラーに異常があることに気付き、やっと見つけた修理工場で壊れたマフラーを直してもらった。この時初めて、マフラーの持つ偉大な機能を再認識した。まさに半世紀前にマクファーレン・バーネット (Frank Macfarlane Burnet, 1899-1985) が自己免疫病について語った次の言葉を思い出させる経験であった。

「体が順調に機能している間は、『こと』は当然のこととして受け取られる。正常機能の中に理解を必要とする何かがあると感知することが可能になるのは、『こと』がうまく行かなくなるときだけである」

話を本題に戻す。実は、ポートランドからハリファックスに向かう船上で、今でも体に深い刻印を残す体験をした。当時は日本から永遠に離れるかもしれないという意識がどこかにあり、自分という存在がこの宇宙に漂う塵のように感じられたためかもしれない。霧に霞むわたしにとっては異界の海であった大西洋を眺めている時、体の芯が寒々と凍るような恐怖を伴う孤独感が襲ってきた。この感情は大洋の上で湧いてきたものだが、ロマン・ロランの言う大自然との一体感というよりはパスカル (Blaise Pascal, 1623-1662) が二つの無限の間で感じた恐怖に近いと言った方が正確だろう。その感覚は、自らの存在に自らの意識を集中せざるを得ない圧倒的な力を持っていたのである。



「ブレーズ・パスカル」

オーギュスタン・パジュー (Augustin Pajou, 1730-1809) 作

ルーブル美術館にて

(2006年12月23日)

パスカルは『パンセ』(*Les Pensées*)の中で最も長い断片になる「人間の不釣り合い」(*Disproportion de l'homme*)において、二つの無限について論じている。われわれ人間は虚無と無限の中間にあり、無限に対しては虚無、虚無に対しては全体に当たるといふ不思議な位置にあることを前にして恐れ戦くであろうと言っている。今で言えば、虚無は量子力学の世界、無限は宇宙物理学の世界になるのだろう。しかし、「考える葦」の断片では、宇宙はわたしを飲み込んでしまうが、考えることによってわたしは宇宙を飲み込むことができると切り返している。宇宙は何も知らないのに対して、われわれ人間は自然の中で最も弱い存在だが、考えることのできる葦だからとパスカルは考えたのである。日本の哲学者で第二次大戦直後に獄死した三木清(1897-1945)も『パスカルにおける人間の研究』(岩波書店、1980)の第一章でこの問題を次のように論じている。世界の中に中間者として存在する人間の状態は恐怖であり、驚愕である。この恐怖、驚愕に動かされる者は、世界とは何であるかと問うに至るであろう。そして、この問いこそが原始的には一つの哲学であるとしている。

現代においては、宇宙は何も知らないという見方に異論を差し挟む人も出ている。例えば、イギリス生まれのアメリカ人物理学者フリーマン・ダイソン(Freeman Dyson, 1923-)博士は、人間だけではなく、素粒子の世界にも全体としての宇宙にも精神が宿っているとし、それぞれ *human mind*、*micro mind*、*macro mind* と名付けている。博士の言う心とは、選択し決定する能力を指している。ミクロの世界、マクロの世界を

観察していると、そうとしか見えない現象があるということなのだろう。その結論は科学によって証明されてはいないが、科学の成果には矛盾しないと考えているようである。

日本語にも「自然に抱かれる」という表現があるが、そのニュアンスはどこか優しく、穏やかさを感じる。科学者の時代、ロッキー山脈の山中で開かれる会議に何度か出席したことがある。夜が更けるまで議論が展開するその会議の帰りに空を見上げると、鋭くも冷え冷えとした光を発する星が満天に散らばっている。冷たい外気の中、手が届きそうなその星空を仰いでいると、日本では感じたことのない自然の中に唯一人放り出されたような寒々とした感覚が襲ってきた。日本の自然には、自分の家の中にいるようなどこか穏やかな気持ちにさせるところがある。哲学にとっては場が重要であり、場に依存し、その制約を受ける。もしパスカルが日本に生まれていたら、おそらくあのような考えには至らなかったのではないだろうか。日本人は自然と一体になるような思考をすと言われ、それは日本人の感受性の問題として片付けられることが多い。しかし、それだけだろうか。この世界の現象に相互に影響し合っていないものはないとすれば、日本の自然がそういう思考を促す特徴を持っている可能性だってあるのではないだろうか。

科学がわれわれの世界観の構築に大きな役割を果たしてきたことは、疑う余地がない。そのお蔭で、われわれが認識できる世界は拡大を続けている。それは一見われわれの想像力が及ぶ範囲を狭めているようにも見える。しかし、宇宙物理学が明らかにする世界の外には何もないのだろうか。ビッグバンの前には何もなかったのか。無からの創造でなかったとしたならば、その前の世界はどのようなものだったのか。科学にその解を期待できるのか。そこに哲学が関わる余地はあるのか。現段階でも科学の外に横たわる全体に関する問題が見えてくる。しかし、科学主義を信奉してしまうと科学が明らかにする「もの・こと」の他は世界に存在しなくなり、この類の問いは視野の外に出てしまう。

古代ギリシャの犬儒学派哲学者にシノペのディオゲネス (Diogenes of Sinope, c. 412 BC-323 BC) という破天荒だが極めて重要なことを考え、実践した哲学者がいる。その彼がどこから来たのかと問われ、「わたしは世界の住人 (*kosmopolitês*) である」と答えたと言われている。この逸話から彼はコスモポリタニズムの元祖とされているが、この言葉を広く解釈すれば、宇宙との一体感を示しているとも言えるだろう。1930年代のパリで貧困の中、『北回帰線』(*Tropic of Cancer*, 1934) や『南回帰線』(*Tropic of*

Capricorn, 1939)などを著わしたアメリカの作家ヘンリー・ミラー (Henry Miller, 1891-1980)氏は、75歳の時に45歳も年の離れた日本人女性ホキ徳田 (1937-)氏と結婚する。その徳田氏に伺ったところによれば、ご自身の若い時は育った山手線の内側が全世界だったようだが、ミラー氏は日頃から“cosmic view”が大切だと言っていたという。自らのことを振り返れば、どのような場所に身を置いてもどこかから離れているという感覚がなくなっていることに気付いている。主観的には「その中に在る」という感覚、さらに踏み込めば、この感覚は宇宙との一体感と通底しているのではないかと思うようになってきた。



『幸いなるかな、ユリシーズのようにみごとな旅をした者は』

ジョアシャン・デュ・ベレーの詩の冒頭が刻まれている

ニースの城の丘 (la Colline du Château) の公園にて

(2011年4月25日)

「幸いなるかな、ユリシーズのようにみごとな旅をした者は」 (*Heureux qui, comme Ulysse, a fait un beau voyage*) で始まる有名な詩がある。フランス語に新風を吹き込んだ人としてその名を挙げられることもある16世紀の詩人ジョアシャン・デュ・ベレー (Joachim Du Bellay, c. 1522-1560) の作である。現代フランスの哲学者リュック・フェリー (Luc Ferry, 1951-)氏は、ユリシーズの長い厳しい旅の中に一つの哲学的意味を見出している。それは戦争から平和への旅であり、放浪から故郷へ、ギリシャ神話の不和と争いの女神エリスから愛と創造力の神エロスへ、そして混沌 (カオス) から調和 (コスモス) への旅である。これは取りも直さず、ユリシーズの旅が智慧の探究という哲学的なものであり、最後に辿り着いたところが自らを宇宙との調和の中に置くことができる愛と創造の境地だったのではないかと推論している。

自らを取り巻いている世界の全体をどこに見るのか。哲学の捉え方が人それぞれであるように、世界観も一つには収斂しないだろう。その中であって、自らを宇宙にまで広げた世界と一体に在るものとして感じる大洋感情、あるいは宇宙的視点を持つとする姿勢には共感を覚えている。この感覚を保ちながら、医者であれば患者に、研究者であれば研究対象に、そして家庭にある人であればその日常に向き合うことができれば、それまでとは違った世界が広がるのではないだろうか。そこから自由の感覚が生まれ、それは感覚や感情からの自由にも繋がるだろう。ひょっとすると、自立や自律、あるいはデモクラティックな精神と言われるものの源泉もこの辺りにあるのかもしれない。そんな茫漠たる思いが湧いている新年のパリである。

(2016年1月3日)